



若林遺跡発掘調査報告書

平成11年度

倉吉市教育委員会

序

この報告書は、鳥取県倉吉土木事務所が実施する一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良事業に伴う事前調査として、平成10年度から11年度にかけて鳥取県倉吉市寺谷字若林・北石坂平において行つた若林遺跡発掘調査の記録です。

調査の結果、横穴式石室を主体部とする古墳時代後期の円墳をはじめ、縄文時代から中世にかけての遺構を確認しました。

なかでも、1号墳は、後世の掘削により遺存状態がよくなかったものの、整美な板石を据え立てた横穴式石室であることを確認しました。この1号墳と同じ丘陵裾部には、2基の古墳が所在しており、当地方における古墳時代後期の群集墳を研究するうえで貴重な資料であるといえます。

最後に、調査にあたりご協力いただきました鳥取県倉吉土木事務所、地元関係者、発掘作業や内務整理作業に従事していただいた方々をはじめ、関係機関、各位に対し深く感謝の意を表するものです。

平成12年3月

倉吉市教育委員会
教育長 足羽一昭

<10>0100572841

例　　言

- 1 本報告書は、一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良事業に伴う事前調査として、平成10年度・11年度に倉吉市教育委員会が、倉吉市寺谷字若林・北石坂平において実施した発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

團　　長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）	調　　査　員　名越　勉（倉吉市文化財保護審議会会长）
調　　査　員　根鈴　輝雄（倉吉博物館主任学芸員）	森下　哲哉（文化財係主任）
根鈴智津子（文化財係主事）	加藤　誠司（文化財係主事）
岡本　智則（文化財係主事）	岡平　拓也（文化財係主事）
調査補助員 山根 雅美・松田 恵子	
事　務　局 新田 征男（教育次長 10年6月まで）	
波田野頌二郎（教育次長 10年7月から）	
山脇 将暉（教育次長兼文化課課長 10年度）	
眞田 廣幸（文化課課長 11年度）	
藤井　見（文化財係係長 11年度）	
山崎 昌子（文化財係主事）	
金田 朋子（臨時職員）	
内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋あつ子・竹歳 晚子・山本 鑑	
- 3 現場での調査は岡本が担当した。遺構の図面整理は岡本・松田、遺物実測は岡本・山根、遺物写真は岡本が担当し、森下・加藤が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤・松嶋・竹歳・山本が担当した。
- 4 本書の執筆は岡本が行った。編集は岡本・松田が担当した。
- 5 予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。
- 6 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1：25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第2図（地形図）は、1：2,500国土基本図「倉吉市平面図」を使用した。
- 7 掘図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第V座標系の北を示す。
- 8 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。
- 9 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	4
1	遺構	7
2	遺物	15
3	若林2号墳	19
IV	まとめ	20
報告書抄録		

挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	若林遺跡調査区位置図	4
第3図	若林遺跡遺構全体図	5
第4図	1号墳調査前地形測量図	7
第5図	1号墳遺構図	8
第6図	1号墳主体部遺構図	9
第7図	1号～3号土壙遺構図	11
第8図	1号落し穴・1号集石状遺構・ピット1遺構図	12
第9図	平坦部断面図	13
第10図	1号・2号溝状遺構、ピット2遺構図	14
第11図	土器	15
第12図	石鏡・剥片	16
第13図	石製品	17
第14図	若林2号墳丘測量図	19

図版目次

図版1	遺跡・遺構 調査前遠景 調査後全景 1号墳調査前全景 1号墳全景
図版2	遺構 1号墳主体部玄室 1号墳主体部玄室掘り方 1号墳主体部玄室内遺物出土状況 1号墳墳丘断ち割りWベルト 1号土壙
図版3	遺構 1号落し穴 1号集石状遺構 ピット1 ピット2 2号土壙 3号土壙 1号・2号溝状遺構
図版4	遺構 調査区北側 調査区北側 5号平坦部
図版5	遺構 調査区北側尾根 若林2号墳 若林2号墳主体部
図版6	遺物 土器
図版7	遺物 石製品・剥片

I 発掘調査に至る経過

平成8年度、一般国道313号（北条倉吉道路）道路改良事業の計画が鳥取県から倉吉市教育委員会に提示された。その計画は、東伯郡北条町地内の国道9号線から倉吉市和田地内まで、国道313号線沿いに並行して総延長7kmのうち倉吉側4.4kmについて道路を新設するものである。当該地とその周辺には遺物散布が確認され、遺跡の存在が想定された。倉吉市教育委員会は、遺跡の存在とその範囲を確定するため、平成9年11月から10年1月にかけて試掘調査を実施した。^{注1)} 試掘調査の結果、倉吉市寺谷字八幡山・若林・北石板平・長谷、和田字大平ラにおいて古墳の周溝、人工的と判断される平坦部等を確認し遺跡の存在が明らかとなった。倉吉市教育委員会は、鳥取県倉吉土木事務所と協議を行い、寺谷字若林・北石板平の6,940m²について、平成10年度1,170m³、11年度5,770m²の2ヵ年にわたって発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、倉吉市が鳥取県から委託を受け、倉吉市教育委員会が主体となって平成10年4月27日～7月1日、11年1月6日～3月26日、4月20日～10月1日まで実施した。

註 国本智則 「和田地区」『倉吉市内遺跡分布調査報告書X』 倉吉市教育委員会 1999年

II 位置と歴史的環境

若林遺跡は、倉吉市街地から北方へ約3km離れた倉吉市寺谷字若林586・字北石板平591にまたがって所在する。本遺跡は、倉吉平野と海岸部との間に大山（標高197.6m）、船ヶ家山（標高171.1m）が並び、両山塊の境を東西に延びる低丘陵の中程に位置する。遺跡は、尾根部分から南斜面裾部分に抜がっており、南面する水田との比高差は尾根頂部で約40m、裾部分で約5mを測る。本遺跡の北側は、大山から北に延びる丘陵と船ヶ家山とに挟まれて南北に延びる谷状の地形をなし、海岸部沿いに広がる低湿地帯へとつながる。

海岸部へつながるこの谷では、縄文時代前期から晩期にかけての島遺跡が所在しており、土器・石器・動物骨格片・丸木舟・貝塚などが出土している。この他、中期の土器・火鏡白・住居の用材とみられる木製品が出土した米里船渡遺跡(16)、北尾遺跡など縄文時代の遺跡が水田下から確認されている。また、本遺跡の所在する丘陵最北端には米里銅鐸出土地(15)が所在する。また、本丘陵最西端の南斜面には弥生時代後期から奈良時代にかけての集落が営まれた西前遺跡(28・29)が調査されている。本遺跡の所在する丘陵の南側には、大山から西に派生した丘陵が四王寺山に向かって延びており、丘陵一帯には堅壁が出土した9号墳をはじめ喜山古墳群(32)が所在する。これら両丘陵に挟まれた細い谷が東西に延びる。

丘陵頂部からの眺望はすぐれており、北側は北条平野の中央から日本海、南から西側にかけては倉吉平野の南西側から遙か中国山脈を見渡せるが、東側は大山が迫る。

倉吉平野の北端は未開発の丘陵部分が多く、倉吉市中央部、西郊と比較すると周知の遺跡の数は少なかったが、近年現地踏査の進捗により遺跡数が増加した。以下、分布図（第1図）範囲内の遺跡を中心に概要を述べる。

旧石器時代の遺跡は少ない。中尾遺跡(43)・長谷遺跡(65)ではナイフ形石器、上神51号墳(5)・高鼻2号墳の調査中に網石刃石核が出土している。その他、横谷遺跡群でナイフ形石器・楔形石器・藤井谷地区予備調査でナイフ形石器を確認したのみで遺構については未確認である。

縄文時代の遺跡は、主なもので20箇所余りが確認されている。住居址は、取木遺跡で2棟、津田峰遺跡で1棟確認している。松ヶ坪遺跡は配石遺構と壺棺墓を確認している。また、縄文時代前期から中期と推定される落し

穴は中尾遺跡で84基、縄文時代後期を中心とする落し穴は長谷遺跡で57基、横谷遺跡群では47基確認している。

弥生時代は、大山の火山活動により形成された、倉吉市西郊の久米ヶ原丘陵を中心として集落跡が存在する。弥生時代中期には福田寺遺跡・遠藤谷峯遺跡・中峯遺跡のわずか3遺跡が確認されているにすぎないが、後期になると急激な人口増加とともに集落が拡散する。

墳墓は、弥生時代前期の土壙墓群としてイキス遺跡・向山古墳群宮ノ峰支群がある。弥生時代後期は、阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群・山根（藤和）四隅突出型墳丘墓・柴栗古墳群(31)の赤生墳丘墓・三度舞墳丘墓(34)・大谷後口谷墳丘墓群などがある。終末期から古墳時代初頭にかけては、土壙墓群から古墳へと変遷していく過程がうかがえる二タ子塚遺跡・中峰古墳群(55)がある。

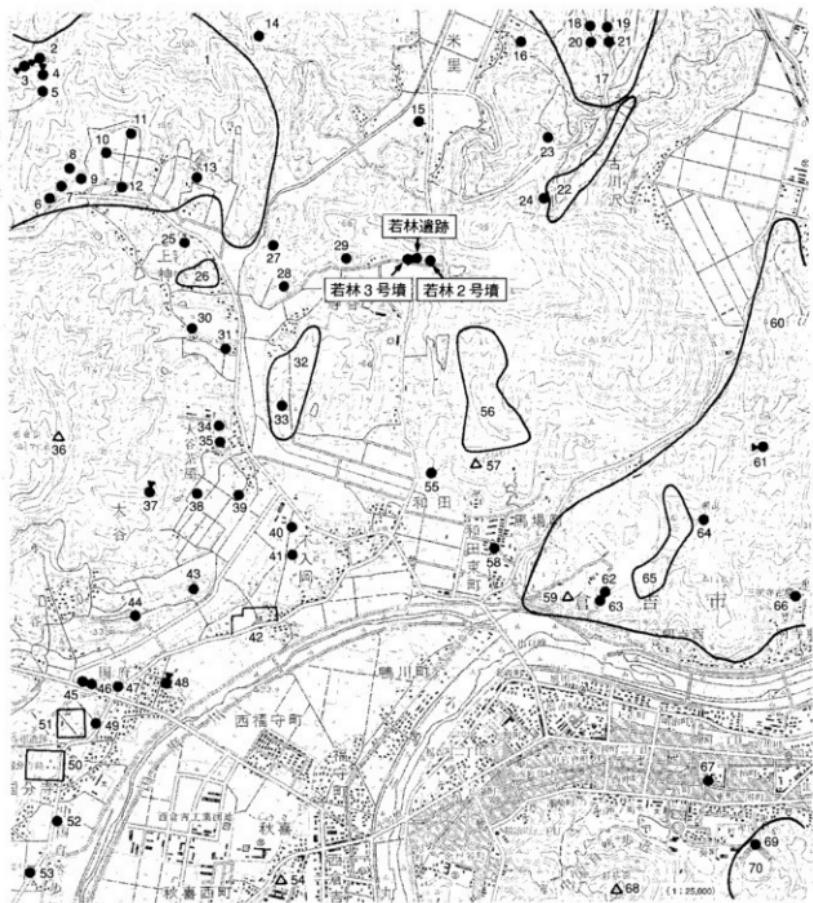
古墳時代前期の首長墓は、粘土櫛を主体部とし、菱鳳鏡・三角縁神獸鏡・二神二獸鏡・多量の鉄器が出土した国分寺古墳(48・前方後方墳?・全長60m)、豎穴式石槨を主体部とし、国分寺古墳とはほぼ同時期に築造された宮ノ峰支群19号墳(方墳・一辺27m)・21号墳(円墳・直径30m)を初現とする。次に東郷湖周辺に馬ノ山2号墳(前方後円墳・全長68m)・4号墳(前方後円墳・全長100m)、宮内孤塚古墳(前方後円墳・全長95m)が築造される。馬ノ山4号墳は長大な豎穴式石槨を主体部とし、船載の三角縁神獸鏡等豊富な遺物が出土している。5世紀代には、山陰地方で最大規模をもち、銘文のある船載の龍虎文鏡が出土した北山古墳(前方後円墳・全長110m)、仿製の三角縁神獸鏡と変形六角鏡、碧玉製鍔形石、滑石製琴柱形石製品などが出土した上神大将塚古墳(30・円墳・直径30m)が築造される。

東伯耆に横穴式石室が導入されたのは、6世紀中頃になる。ドーム状に小口積みした天井に仕切石や石棚などの施設をもつ大宮古墳(円墳・直径30m)、箱式石棺の伝統を色濃く引く独特の石室形態の片平4号墳(円墳・15m)、豎穴系横口式石室の系譜を引く上種東3号墳(円墳・直径12m)など異なった石室形態のものがほぼ同時期に導入された。この3基の初期横穴式石室墳はそれぞれ導入された地域を中心に展開をみせるが、6世紀の後半頃、石屋形を簡略化した石室構造をもつ向山6号墳(61・前方後円墳・全長40m)築造以降、石室構造は簡略化が進む。7世紀の中頃から後半にかけては取木遺跡・一反半田遺跡・両長谷遺跡・養水2号墳・郊家平古墳群など、横穴式石室の規模も極端に矮小化するなかで、7世紀になって間もなく築造された三明寺古墳(66・円墳・直径18m・国史跡)、7世紀の中頃に整美な切石を用いた福庭古墳(円墳・直径35m)は、石室の規模・石工技術において隔絶した存在である。

古墳時代の集落は、現在20以上を確認している。後中尾遺跡・夏谷遺跡(56)では50棟以上の住居址が重なり合って検出された。他に、後口谷遺跡・西山遺跡(10)・桜木遺跡(12)・西前遺跡(28・29)・クズマ遺跡1次(7)がある。また、不入岡遺跡(42)では住居内よりオンドル状造構が検出され、非在地系の土器が出土した。

奈良時代に入ると久米ヶ原丘陵の東麓部周辺に伯耆国衙・伯耆国分寺(50)・伯耆国分尼寺(51)、伯耆国物貢納施設と推定されている不入岡遺跡が近接して設けられ、伯耆国の政治・文化の中心地となる。寺院としては、銅製匙・銅製獸頭が出土した大御堂廃寺・大原廃寺・石塚廃寺がある。

1 上神古墳群	6 上神119号墳	11 谷畠遺跡	16 船渡遺跡	21 土下213号墳
2 上神44号墳	7 クズマ遺跡1次	12 桜木遺跡	17 土下古墳群	22 下張坪遺跡
3 上神45号墳	8 クズマ遺跡2次	13 上神宮ノ前遺跡	18 土下210号墳	23 米里第1遺跡
4 上神48号墳	9 イガミ松遺跡	14 曲226号墳	19 土下211号墳	24 米里第2遺跡
5 上神51号墳	10 西山遺跡	15 米里銅鐸出土地	20 土下212号墳	25 東狭間古墳



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

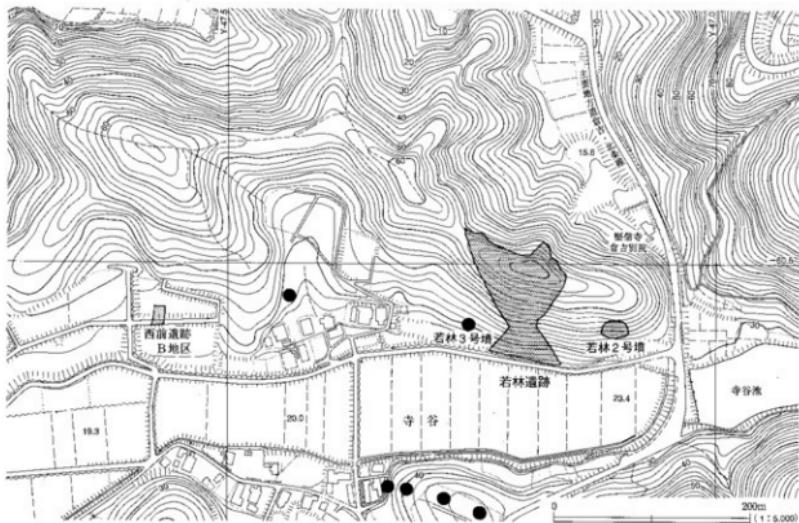
26 猿山遺跡	35 イザ原遺跡	44 中尾遺跡2次	53 今倉遺跡	62 向山309号墳
27 トドケ遺跡	36 大谷城跡	45 古神宮古墓	54 北ノ城跡	63 向山310号墳
28 西前遺跡A地区	37 大谷大将塚古墳	46 打塚遺跡	55 中峰古墳群	64 三明寺大将塚古墳
29 西前遺跡B地区	38 小林古墳群	47 郊塚遺跡	56 夏谷遺跡	65 長谷遺跡
30 上神大将塚古墳	39 イザ原古墳群	48 国分寺古墳	57 和田城跡	66 三明寺古墳
31 荘栗古墳群	40 沢ベリ遺跡1次	49 宮ノ下遺跡	58 平ル林遺跡	67 山名氏館跡推定地
32 屋喜山古墳群	41 沢ベリ遺跡2次	50 伯耆国分寺跡	59 和田東城跡	68 打吹城跡
33 屋喜山9号墳	42 不入岡遺跡	51 伯耆国分尼寺跡	60 向山古墳群	69 梅田遺跡
34 三度舞墳丘墓	43 中尾遺跡1次	52 河原毛田遺跡	61 向山6号墳	70 古墳群

平安時代以降の遺跡は寺院跡として、四王寺山山頂に四王寺、大日寺遺跡群、広瀬庵寺がある。城跡は、小鴨氏の居城岩倉城跡、伯耆守護山名氏の居城打吹城跡(68)などがある。居館跡は、山名氏館跡推定地(67・15世紀)、今倉遺跡(53・15~16世紀)が分かっているにすぎない。墳墓は、不入岡遺跡・打塚遺跡(46)で方形のマウンドをもつもの、宮ノ下遺跡(49)で土壙墓、福本家ノ上古墓で五輪塔の下部埋葬施設、家ノ後口1号古墓で宝篋印塔の下部施設が調査されている。

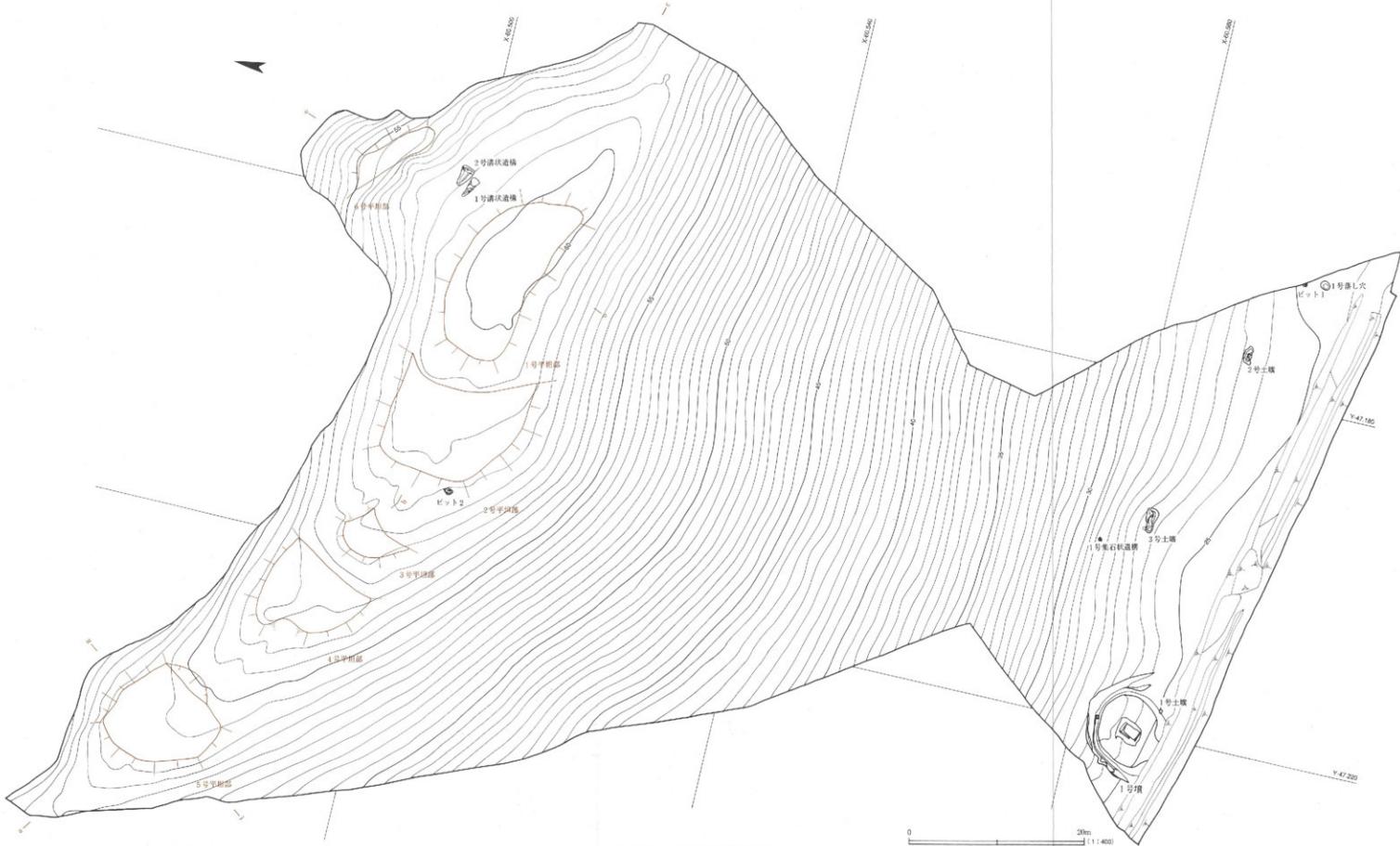
III 調査の概要

調査は、丘陵裾部分を平成10年度、尾根部分と斜面部分を11年度に行った。いずれも調査前地形測量を100分の1の縮尺で平板実測した。表土除去作業は、丘陵裾部分、尾根部分については人力で、斜面部分についてはバッカホウによって行った。

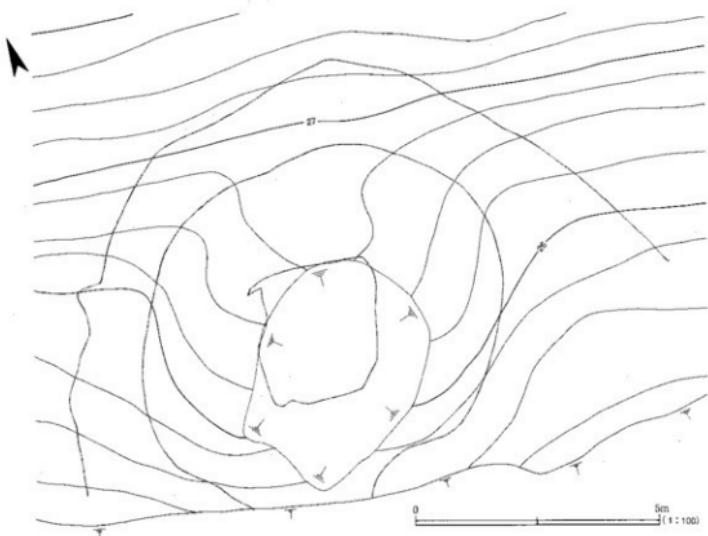
古墳の調査は、まず墳丘および周辺の地形測量を行い、地形図(1:100)を作成した。発掘は、一部露出していた横穴式石室の中心線(南北方向)を基準として、玄室内でこれを直交させた直線を東西方向に延長して墳丘を4区画に分け、各区にはそれぞれ断面観察用のベルトを設定して行った。約0.3mに堆積した表土を除去すると、石室の西側側壁上面および周溝のプランを検出した。石室の調査は、石室内に落ち込んでいる石材や流れ込んでいる土砂を排除し、石室の床面に残存する遺物の検出を行った。周溝は、埋土を排除して完掘した。墳丘盛土は、土層観察用のベルトを残して墳丘基盤まで掘り下げた。墓壙は振り方を確認し、掘り下げて墓壙底を確認した。石室を構成していた石材を抜き取り調査を終了した。



第2図 若林遺跡調査区位置図



第3図 若林遺跡遺構全体図



第4図 1号墳調査前地形測量図

尾根部分は、尾根筋を基準にし、平坦部で十字になるよう断面観察用ベルトを設定し表土除去を行った。遺構の測量は、国土座標による4mメッシュを組み、主体部と遺物出土状況図については10分の1で、その他の遺構は20分の1の縮尺で実測した。調査地の地形測量は、平板を使用し、100分の1、25cm毎の等高線で測量した。調査後の面積は、平成10年度1,170m²、平成11年度5,770m²、合計6,940m²である。

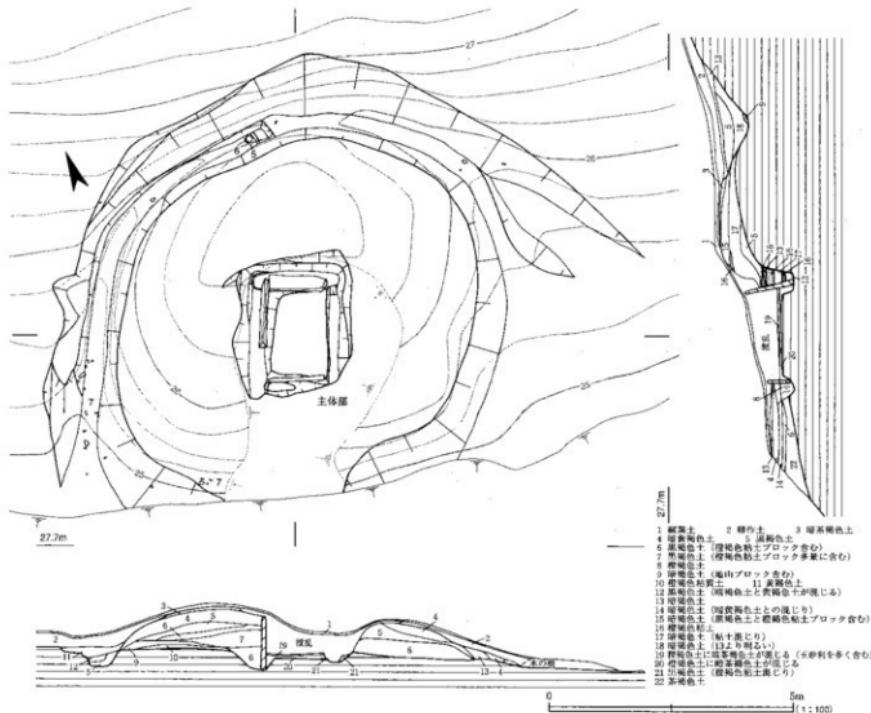
1 遺構

平成10年度調査（丘陵裾部分）

調査の結果、古墳1基・土塗3基・落し穴1基・集石状遺構1・ピット1を検出した。

1号墳

墳丘 本古墳は、東西に延びる丘陵裾部、標高25~27m付近に立地する円墳である。調査前は、墳丘頂部は壅んでおり、石室が一部露出していた。地形測量図によると、調査前の墳丘の規模は直径約10m・高さ約1.5mであった。発掘後の周溝を含めた規模は、東西約15.8m・南北約20.0mである。周溝底から墳丘基盤までの高さは0.27m、さらに現存する墳丘頂部までの高さは0.35mである。盛土の築成状況は、石室東側、北側、西側については地山面まで削り、墳丘の南側半分については旧表土の黒色土面から盛土している。石室周辺ではやや水平に、墳丘裾部あたりではやや傾斜させて、黒褐色土と地山崩壊土を含む橙褐色粘質土をつきかためている。墳丘盛土は、石室の北側で0.60m、東側で0.70m、西側で0.88m遺存する。古墳の南側は、後世の掘削を受け前庭部は遺存せず、周溝東側から南側にかけても後世の掘削のためか周溝外縁線が不明瞭である。

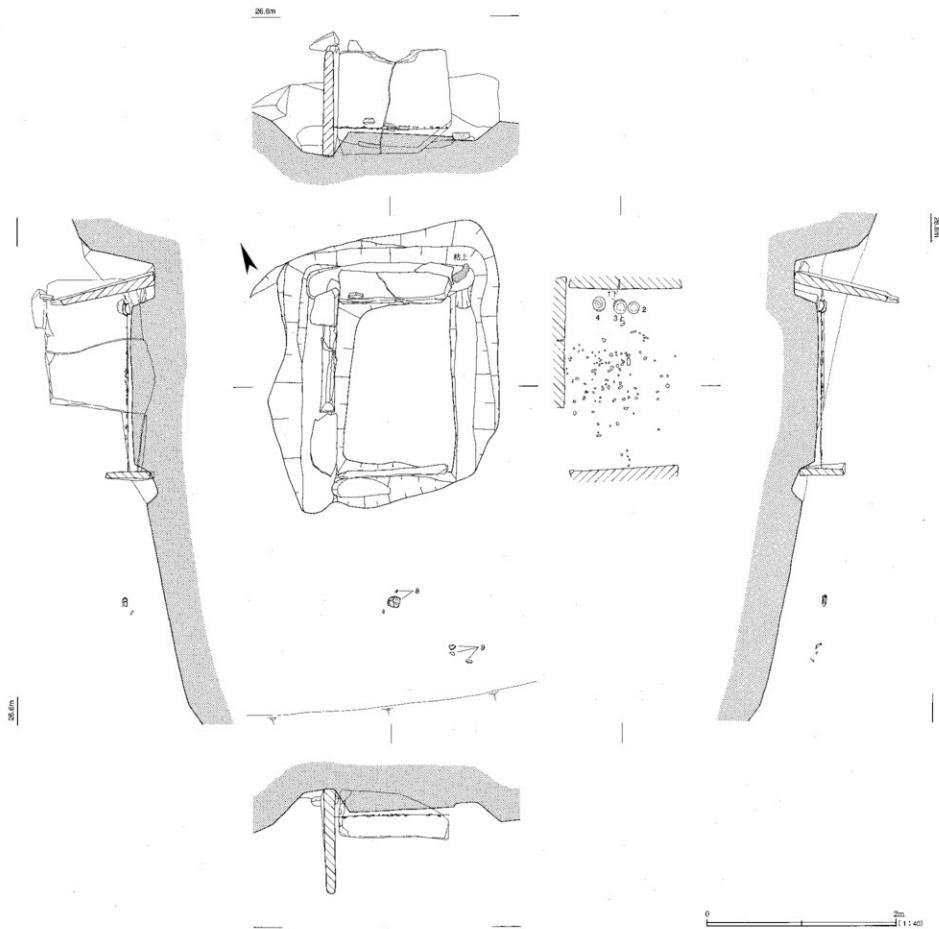


第5図 1号墳遺構図

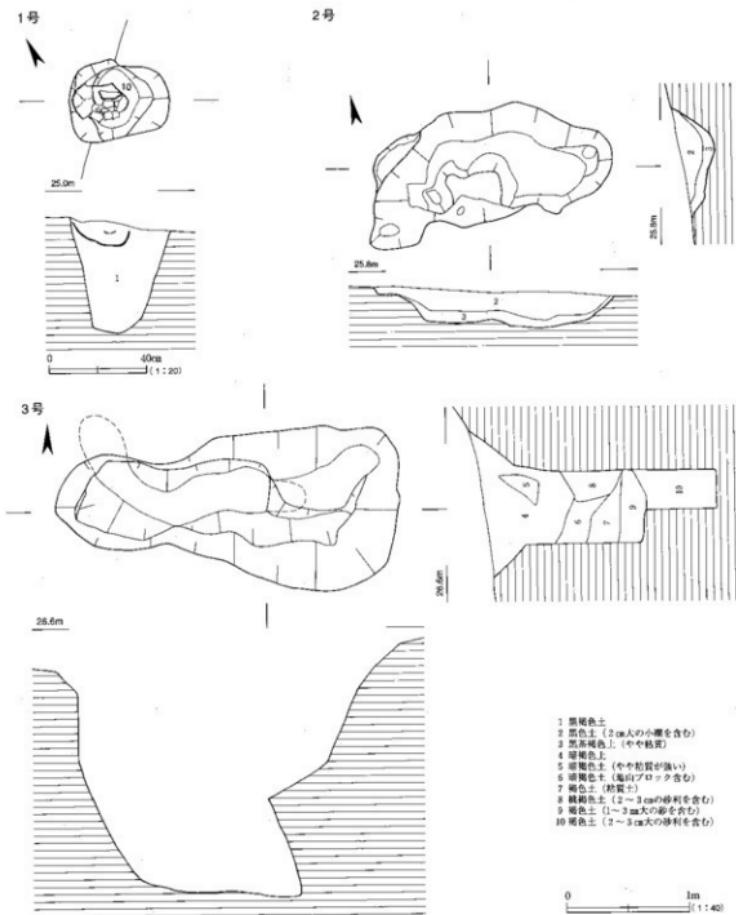
周溝 墳丘南側の前庭部分が消失しているが、ほぼ全周するものと推定される。古墳の中心線を境に西側半分は東側より一段深く掘り下げられる。断面形は、東側半分は緩やかなU字状を呈するが、西側半分は底面が平で逆台形を呈する。検出面での幅は北側が最大で2.90mを測り、西側は1.90mと狭くなる。検出面からの深さは北側で最大1.20mを測り、西側は0.64mと浅くなる。

北西側周溝底、須恵器壙蓋2点(5・6)が天井部を下にし重ねた状態で出土した。また、南西側の周溝底から墳丘にかけて須恵器大型鏡片(7)が集中して出土した。

主体部 墳丘中央に位置する横穴式石室で南に開口する。主軸はN22°Eである。石室は玄室と羨道とからなり、玄室の規模は、内法で長さ1.91m、中央の幅は推定で1.23mを測る。石室を構成している石は、現状では基底石だけが残り、奥壁1枚、西側側壁1枚、仕切石1枚である。石室に用いられている石材は、板状節理のある比較的大型の板石である。天井石および東側側壁部分は失われており、石室内には大量の板石片が落ち込んでいた。奥壁は、基底部が玄室寄りに傾いた状態で、床面から奥壁上端までの高さ81cmを測るが、築造当時は垂直に立っていたと推定され、復元すると高さ84cmを測る。厚さは16cm・最大幅121cmを測る。奥壁掘り方の東側の底面には、奥壁を固定するため長さ48cm・幅23cm・厚さ2cmの裏込め石がほぼ水平に敷かれる。西側側壁は、奥壁に対しても直角に、床面に対して垂直に立てている。玄室床面から側壁上端までの高さ87cmを測り、奥壁基底石よ



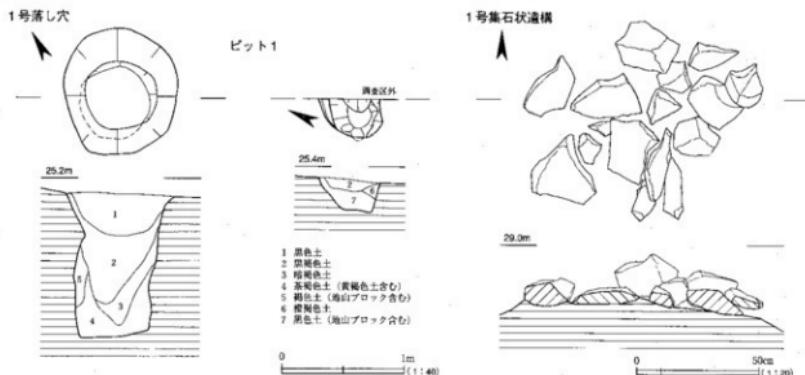
第6图 1号填主体部造模图



第7図 1号～3号土塚遺構図

り若干高くなる。幅140cm・厚さ12cmを測る。西側側壁の北端上縁には、長さ41cm・幅29cm・厚さ16cmの割石が1個遺存しており、天井石との間に小口積みされたものと考えられる。また、西側側壁南側の掘り方底面には、側壁を固定するための長さ66cm・幅28cm・厚さ1.5cmの裏込め石がほぼ水平に敷かれる。仕切石は、玄室床面から仕切石上端までの高さ25cm・幅117cm・厚さ7cmを測る。玄室床面は、3cm以下の王砂利をほぼ全域に厚さ約2~3cmほど敷きつめ、床面を水平にしている。

石室の前面において旗道床面を検出した。石材及び石材を据え立てた掘り方は攪乱のため遺存しない。床面のレベルは玄室床面とほぼ同じだが、仕切石に接する部分で緩やかに高くなり、玄室床面とのレベル差約12cmを測る。旗道は、石室の中心軸とはほぼ平行にまっすぐ延び、全長約2m・幅約1m前後と推定される。



第8図 1号落し穴・1号集石状遺構・ピット1遺構図

出土遺物は、玄室床面で、奥壁に沿って須恵器壙蓋2点(1・2)・壙身2点(3・4)が出土した。羨道部では、仕切石から1.3m南側の床面直上で須恵器壙身1点(8)、さらにその南東側70cm離れて須恵器高壙片(9)が出土した。

墓壙 平面形は隅丸方形だが、北東隅と西側が一部外に張り出す。地山検出面での主軸上の長さは2.82m・墓壙中央の幅は2.41m・深さ0.16mを測る。墓壙底はほぼ水平で、石室床面に暗褐色土を入れ水平を保っている。墓壙底には、石材を据えるための掘り込みをほどこしている。奥壁部分で長さ1.87m・幅0.50m・墓壙底からの深さ0.23m、西側側壁部分で長さ2.63m・幅0.73m・墓壙底からの深さ0.25m、仕切石部分で、長さ0.62m・幅0.20m・墓壙底からの深さ0.25mを測る。

1号土壙 1号墳の南東側周溝底に位置する。1号墳の調査後、周溝底を約10cmほど削平したところで検出した。規模は長さ0.41m・幅0.29m、検出面からの深さ0.45mを測る。土壙検出面で土師器壙(10)の上半約2分の1が横向きに置かれていた。

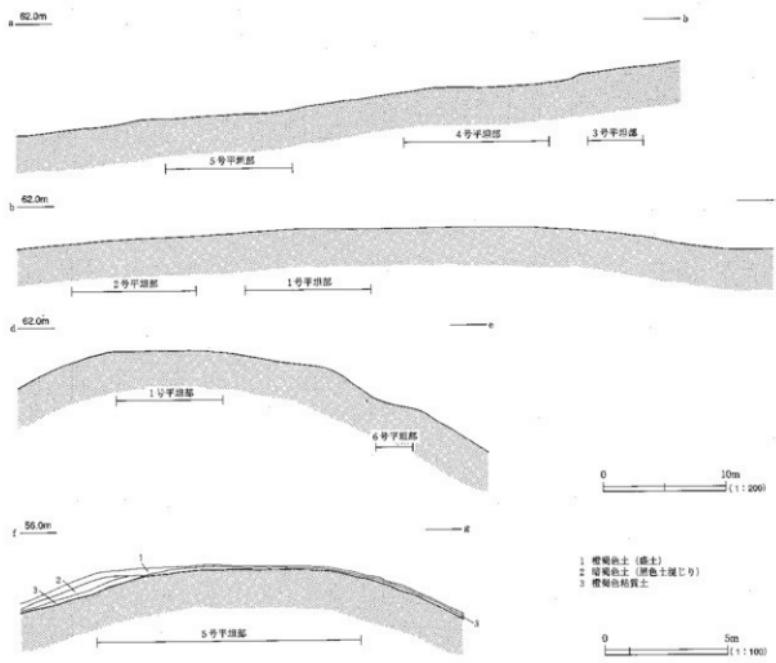
2号土壙 調査区南東部に位置し、主軸方向はN102°Eである。平面形は歪で不明瞭で、掘り方規模は長軸2.00m・短軸0.91mで等高線に沿って東西方向に長い。検出面からの深さは約0.3mを測る。底面も平坦でなく歪。遺物はなく、時期・性格ともに不明。

3号土壙 2号土壙の西側約22m離れて位置し、主軸方向はN90°Eである。平面形は歪で不明瞭で、掘り方規模は長軸2.85m・短軸1.21mで等高線に沿って東西方向に長い。検出面からの深さは約2.0mを測る。底面も平坦でなく歪。遺物はなく、時期・性格ともに不明。

1号落し穴 調査区南東端に所在する。丘陵裾部分のややなだらかな緩斜面標高約25m付近に位置する。平面形は検出面が長軸1.03m・短軸0.94mでほぼ円形を呈し、検出面からの深さ約1.2mを測る。底面は長軸0.60m・短軸0.58mを測り円形を呈する。断面形態は垂直。底面に杭穴は確認できなかった。出土遺物はない。

1号集石状遺構 調査区南側の斜面で検出した。礫群の広がりは、長径1.00m・短径0.90mの稍円形である。礫は遺跡周辺で用意に入手できる安山岩類で、拳大から人頭大のものを16個使用している。赤変しているものはない。礫群の周辺には構築の際の掘り込みは認められない。出土遺物はなく、時期不明。

ピット1 1号落し穴の北側約2m離れた調査区で検出した。規模は南北径0.60m・深さ0.25mを測る。出土遺物はない。



第9図 平坦部断面図

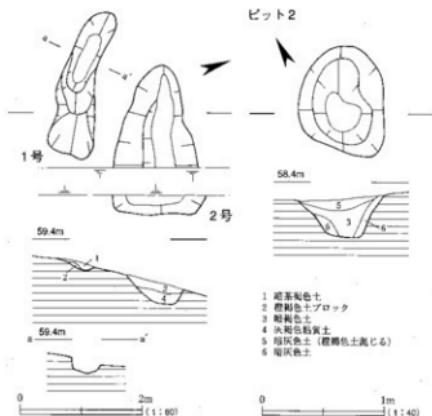
平成11年度調査（丘陵尾根部分）

丘陵尾根部分で平坦部6・溝状遺構2条・ビット1を検出した。

平坦部 調査の結果、山頂の東西に延びる尾根上の頂部から西側にかけて総延長80mにわたって5ヶ所、この尾根から北に向かって派生する支根の基部に1ヶ所、合計6ヶ所を確認した。平坦部は、全体的に内縁線・肩が不明瞭で、近接する平坦部との比高差はほとんどなく、建物跡・井戸・狼煙跡等の施設は確認できなかった。周辺の踏査結果を踏まえると、連続する調査区外の尾根上は、全体的になだらかで、堀切等ではなく顕著な平坦部も確認できないが、5号平坦部の南側肩部分で平坦部の拡張を確認し、遺構外の斜面で土師質土器2片を採取していることから、6ヶ所の平坦部については曲輪の可能性が想定される。

1号平坦部 面積約156m²、平坦部のなかで最大規模。標高約60m。丘陵の頂部に位置し、肩は不明瞭で平坦面も平滑でなく、ほぼ自然の地形。遺物は角閃石安山岩製磨石片1点(S23)を確認した。また、平坦部外で黒曜石製石礫1点(S1)・剥片1点(S5)、角閃石安山岩製敲石1点(S31)を確認した。

2号平坦部 面積約147m²、標高約59m。1号平坦部の西側約5m離れて位置する。内縁線・肩ともに不明瞭で、平坦面も平滑でない。近接する平坦1との比高差約1mを測る。遺物は、表土除去中および遺構精査中に、安山岩質磨製石斧1点(S33)、黒曜石製石礫3点(S2~4)・剥片6点(S6・7・9・11~13)、水晶剥片2点(S20・21)を確認した。



第10図 1号・2号溝状遺構、ピット2遺構図

3号平坦部 面積約22m²で平坦部のなかで最小規模。平坦の北東部分は後世の山道により掘削を受ける。標高約57.5m。2号平坦部の西側約8m離れて位置する。内縁線・肩とともに不明瞭で、平坦面も平滑でない。近接する2号平坦部との比高差約1.5mを測る。遺物は出土しなかった。

4号平坦部 面積約80m²で平坦の北西部分は後世の山道により一部掘削を受ける。標高約56.5m。3号平坦部の西側約3m離れて位置する。内縁線・肩ともに不明瞭だが、平坦面は平滑である。近接する3号平坦部との比高差約1mを測る。遺物は、黒曜石剥片1点（S14）を確認した。

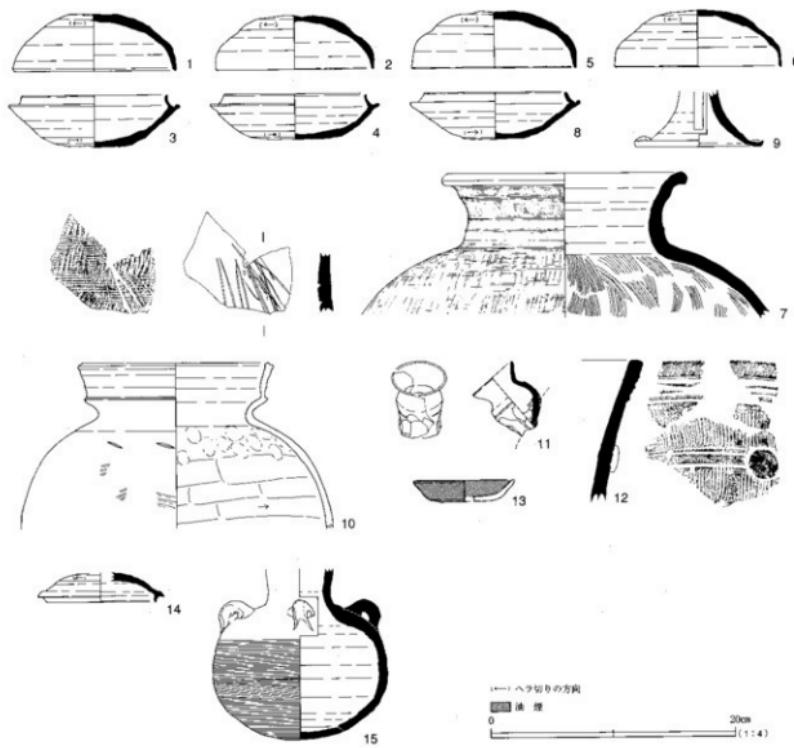
5号平坦部 面積約98m²。標高約54.5m。4号平坦部の西側約11m離れ、尾根の最西端に位置する。内縁線・肩ともに明瞭であり、平坦面も平滑である。南側肩部分は、尾根筋部分を掘削したときの橙褐色粘質土を約0.2mの厚さで旧表土の黒色土の上に置き、南斜面側に約3mほど平坦面を拡張している。近接する4号平坦部との比高差約2mを測る。遺物は黒曜石剥片1点（S15）を確認した。

6号平坦部 面積約23m²。東西にのびる尾根の1号平坦部から北にのびる支根の基部標高約56mに位置する。1号平坦部の北側約11m離れる。内縁線・肩ともに明瞭であり、平坦面も比較的平滑である。近接する1号平坦部との比高差約4mを測る。遺物は出土しなかった。

1号溝状遺構 1号平坦部と6号平坦部の間に位置する。尾根に沿って東西方向に延びる。規模は長さ2.46m・幅0.64m、検出面からの深さ0.1mで、断面形はU字形を呈する。遺物はなく時期不明。

2号溝状遺構 1号溝状遺構の北側に並行して延びる。規模は長さ2.46m・幅0.64m、検出面からの深さ0.1mで、断面形はU字形を呈する。遺物はなく時期不明。

ピット2 2号平坦部の南西隅から西側に約2m離れて検出した。規模は長径0.88m・短径0.70m、深さ0.32mを測る。出土遺物はない。



第11図 土器

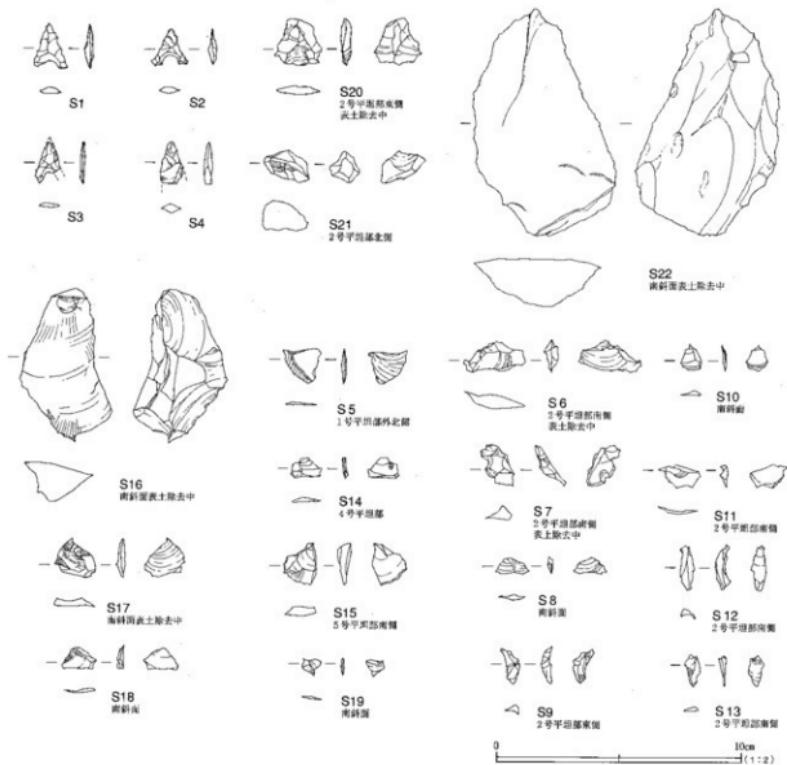
2 遺物

出土した遺物は土師器、須恵器、土師質土器、石礫、剥片、磨石、敲石、磨製石斧、砥石・石鋸である。出土位置は、1号墳の墳丘・周溝・玄室・羨道部、1号土壙・平坦部、斜面部分からであった。土器は、細片が多く図化可能なものが少なかった。法量の〈 〉は推定値。

1号墳

須恵器坏蓋（1・2・5・6） 1・2は玄室奥壁寄り床面直上から坏身3・4とともに出土。5・6は北西側周溝底面から出土。口縁部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる。天井部外面ヘラ切り未調整。2は天井部外面に指頭圧痕が残る。内面多方向の仕上げナデ。口縁部内外面ヨコナデ。焼成不良。色調は淡褐色で、胎土は1~2mm大の砂粒を僅かに含む。口径は順に13.1・12.8・13.3・〈13.6〉cm、器高は4.7・4.4・4.8・〈4.6〉cmである。1・2は3・4とセットの可能性がある。全てほぼ完形。

須恵器坏身（3・4・8） 3・4は1・2とともに玄室奥壁寄り床面直上から出土。8は羨道床面から出土。たちあがりは矮小化し、口縁端部は丸くおさめる。受部は、偏平で外上方に短く伸び、8は受部の上面にヘラによる1条の凹線を施す。体部外面ヘラ切り未調整。内面多方向の仕上げナデ。口縁部内外面ヨコナデ。3・8は



第12図 石器・断片

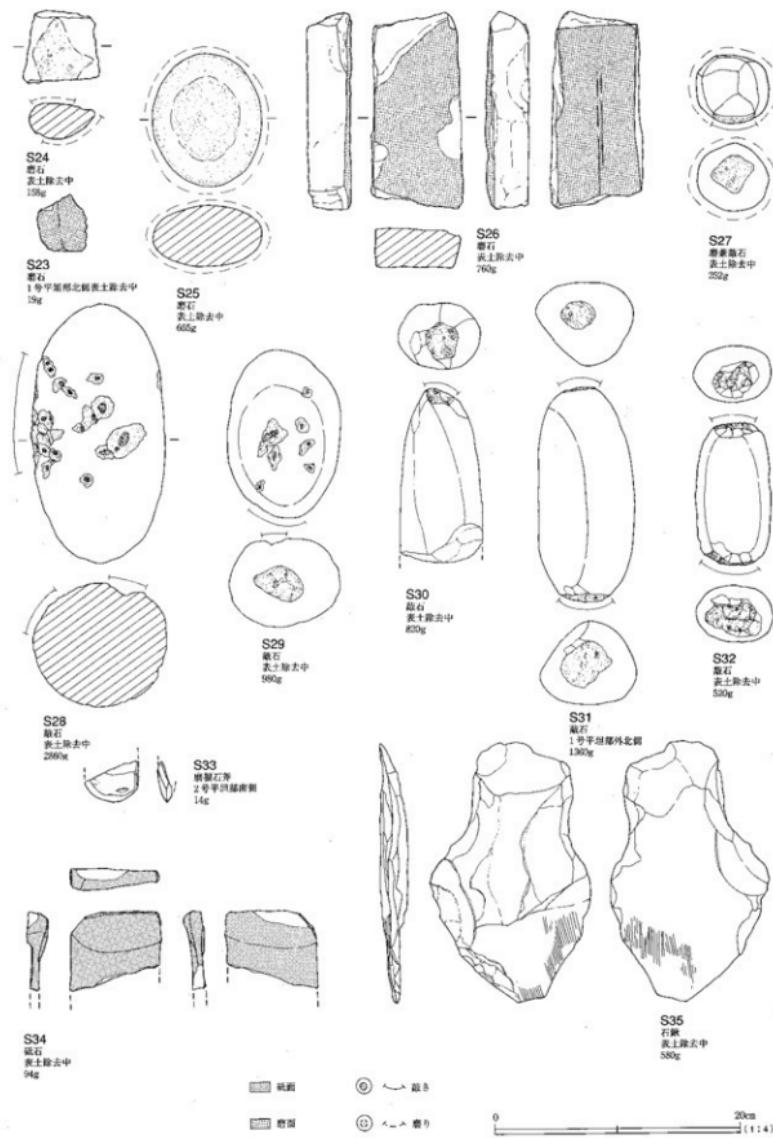
焼成不良、色調は淡褐色。4は焼成普通で色調は淡灰色。胎土は1~2mm大の砂粒を僅かに含む。口径は順に11.8·10.6·12.5·<11.6>cm、器高は4.2·3.7·<3.8>cmである。4は焼き歪みが著しい。8は口縁部約3分の1遺存、その他は全てほぼ完形。

須恵器壺(7) 南西側の周溝底から埴丘にかけて出土。大型。口縁部は大きく外反し、口縁端部は下方へ屈曲する。肩部外面に線刻あり。焼成普通。色調は淡灰色で、胎土は2mm以下の砂粒を含む。口径<19.2>cm。口縁部4分の3遺存。

須恵器高壺(9) 美道床面出土。長方形2透し。焼成普通。色調は暗灰色で、胎土は2mm以下の砂粒を含む。脚部約2分の1遺存。

1号土壙

土器類(10) 検出面出土。口縁部は、短く上外方へのびる二重口縁。体部外面タタキ後ナデ消す。肩部外面刻み目2ヶ所でめぐらない。頸部内面指頭圧痕、以下横方向のヘラケズリでヘラケズリの位置は低い。焼成普通。色調は黄褐色で、胎土は3mm以下の砂粒を多く含む。口径<15.1>cm。口縁部から体部にかけて約2分の1遺存。



第13図 石製品

遺構外

須恵器壺（11） 調査区南東隅表採。装飾須恵器壺の肩部外面に配置される小型壺破片と推定される。焼成普通。色調は淡灰色で、胎土は2mm以下の砂粒を含む。口径<4.4>・器高<5.1>・最大胴径<4.0>cm。約2分の1遺存。

須恵器甕（12） 調査区南表採。大型。口縁部外面に円形浮文あり。焼成普通。色調は青灰色で、胎土は2mm以下の砂粒を含む。

土師質土器皿（13） 調査区南側表土除去中出土。焼成普通。色調は黒色で、内外面油煙付着が著しい。胎土は1mm以下の砂粒を含む。口径<8.2>・器高<1.7>cm。口縁部から底部にかけて約3分の1遺存。

調査区外

須恵器壺蓋（14） 調査区外の若林2号墳表採。器高は低く小型。天井部と口縁部との境界は不明瞭。かえりは口縁端部より下方へ突出。焼成普通。色調は暗灰色で、胎土は2mm以下の砂粒を含む。口径<8.9>cm。

須恵器四耳壺（15） 調査区外の若林3号墳東側表採。体部球体で、肩部外面の4方に耳が付く。焼成普通、色調は暗灰色で、胎土は2mm以下の砂粒を含む。最大胴径<14.3>cm。口縁部欠損。

石製品・調片

石鏡（S 1～4） S 1は1号平坦部外北側出土。黒曜石。基部は極凹形。中央断面形は平凸形。突端部鋭い。長さ18.0mm・幅13.5mm・厚さ2.5mm・重さ300mg。

S 2は2号平坦部南側出土。黒曜石。基部は極凹形。中央断面形は菱形。突端部鋭い。長さ15.5mm・幅14.5mm・厚さ3.0mm・重さ300mg。

S 3は2号平坦部出土。黒曜石。基部は極凹形。中央断面形は平凸形。突端部欠損。残存長16.0mm・残存幅10.5mm・厚さ1.0mm・重さ200mg。

S 4は2号平坦部出土。黒曜石。中央断面形は菱形。脚部欠損。残存長17.5mm・残存幅9.5mm・厚さ3.5mm・重さ500mg。

剥片（S 5～S 22） 18点出土。1号平坦部外北側1点、2号平坦部東側2点・北側1点・南側5点、4号平坦部1点、5号平坦部南側1点、南斜面7点出土。いずれも橙褐色粘質土上面で出土。長さは92.5～6.5mm。S 22はサヌカイトで風化著しい。S 20・21は水晶、他は全て黒曜石。2号平坦部南側に集中する。

磨石（S 23～S 26） 5点出土。長さ5.5～16.1cm。S 24は花崗岩、他は全て角閃石安山岩。表土除去中に出土。

敲石（S 28～S 32） 5点出土。長さ6.2～10.9cm。S 30は花崗岩、他は全て角閃石安山岩。S 31は1号平坦部外、他は全て表土除去中に出土。

磨兼敲石（S 27） 表土除去中出土。長さ5.5cm。角閃石安山岩。

磨製石斧（S 33） 2号平坦部南側出土。残長3.3cm・幅4.3cm。安山岩。

砥石（S 34） 表土除去中出土。残長6.5cm・幅7.5cm。角閃石安山岩。

石鏡（S 35） 表土除去中出土。残長21.3cm・幅13.0cm・厚さ2.2cm。角閃石安山岩。

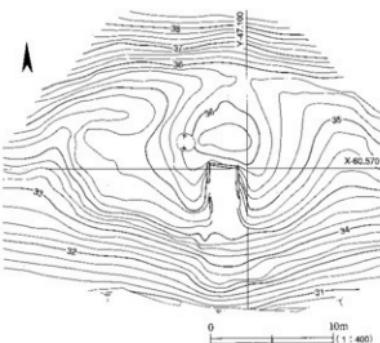
3 若林2号墳

1号墳の東側約120mの同一丘陵の裾部分、標高約35m付近に立地する前方後円墳である。1号墳との比高差は約10mを測る。この古墳は開発区域外であったが、若林遺跡を解明する上で重要と考え、平板による墳丘測量を実施した。推定される墳丘全長は22m、周溝と見られる平坦面を含めると約28m、主軸方向はN91°Eで前方部が西、後円部が東に向く。推定される後円部直径約16m・高さ約2m、前方部幅約7m(復元)・高さ約1m、前方部と後円部との比高差は約1mを測る。

主体部は横穴式石室1基を後円部に確認した。後円部中央に位置し、主軸と直交して南側に開口する横穴式石室である。天井石は既に消失しており、奥壁1枚を東側側石1枚と西側側石1枚が挟み込んでおり、羨道部西側側石の一部が露出する。石室の全長は4.3m以上、玄室幅は奥壁寄りで2.35mを測る。

古墳は、前方部と後円部の比高差がほとんどない。前方部長が後円部径の2分の1以下4分の1以上に含まれ、所謂帆立貝形前方後円墳の範疇に含まれる。主体部が横穴式石室で大型の板状節理のある安山岩を用材としており、所謂扁平板石組石室と呼ばれる形態である。表面採取で須恵器坏蓋片(15)(陰田7新)を1点確認している。以上の点から概ね6世紀後半に築造され7世紀前半まで造営されたと推定される。

註 萩本 勝・佐吉和枝 「須恵器について」『陰田』 米子市教育委員会 1984年



第14図 若林2号墳墳丘測量図

IV まとめ

若林遺跡は、倉吉平野と海岸部との間に大山（標高197.6m）、蜘蛛山（標高171.1m）が並び、両山塊の境を東西に延びる低丘陵の中程に所在する、縄文時代から中世にかけての遺跡である。平成10年度・11年度の2カ年にわたる発掘調査の結果、落し穴1基・集石状遺構1基・円墳1基・平坦部6・溝状遺構2条・土壙3基・ピット2基を検出した。

以下、若林1号墳を中心に明らかになった事柄を整理しまとめとする。

若林1号墳は、直径約20m、周溝底から現存する墳頂部までの高さ1.25mを測る円墳である。調査前は、盃掘坑があり、天井部および東側側壁は失われていたが、石室基底部が遺存しており、奥壁・側壁は偏平な1枚石を用い、奥壁を両側壁が挟み込み、玄室と羨道を仕切石で区画する形態の石室であることが明らかとなった。また、玄室床面には3cm以下の玉砂利が敷かれ、奥壁寄りの床面には須恵器蓋坏が遺存していた。古墳の築造年代については、玄室内および羨道部・北西側から南西側にかけた周溝底から出土した須恵器により判断した。

須恵器は、玄室床面の奥壁寄りで壺蓋2点・坏身2点・羨道床面から坏身1点・高坏脚部片・北西側周溝底で壺蓋2点・南西側周溝底から墳丘裾部にかけて須恵器蓋が出土した。玄室内出土須恵器蓋坏は全て完形品で、奥壁に沿って西から坏身(4)・壺蓋(1)・壺蓋(2)とほぼ直線に並び、壺蓋(1)の上に坏身(3)を重ね、全て伏せた状態で出土したが、セット関係については不明である。出土状況から、被葬者埋葬時の供獻土器と考えられる。羨道部・北西側周溝底から出土した蓋坏もほぼ完形品で、供獻状態で出土した。坏身の口径は12.8~13.4cm、坏身の口径は11.8cmを測り、小型化の傾向がみられる。坏身のたちあがりは低く、壺蓋と坏身は逆転していない。壺蓋天井部外面および坏身底部外面はヘラ切り未調整である。坏の形態・手法から陶邑編年^{註1)}のTK217に比定される。また、羨道出土高坏(9)・南西側周溝出土臺(7)もTK217に並行するもので、時期差がなくほぼ同時期の供獻と考えられる。したがって、古墳築造年代は7世紀前葉と考えられる。

南西側周溝底から墳丘裾部にかけて出土した大臺(7)は破碎された状態で出土した。倉吉市山際2号墳^{註2)}、取木古墳群^{註3)}でも、石室前面に向かって右側周溝内より須恵器大臺が破碎された状態で出土しており、類似性が認められる。若林1号墳の場合、臺片が墳丘裾部に広がることや、石室前面というよりや側面寄りに位置すること等により検討をする。

以上、若林1号墳を整理すると、

- 1 玄室の平面形は、内法で長さ1.91m・奥壁幅1.23mの略方形を呈し、玄室床面積2.34m²、玄室比1.54を示す。
- 2 奥壁と側壁は高さ約0.85mで、基底石の上端を描える。用材は偏平な板石。
- 3 玄室と羨道は仕切石で区切られるが段差をもたない。
- 4 築造年代は、出土須恵器の形態・手法から7世紀の前葉と考えられる。

であり、若林1号墳は当地域において6世紀後半以降普遍的にみられる石室形態といえる。

当地域における横穴式石室についての研究は、土生田純之氏、牧本哲雄氏によって、石室形態の分類および系譜についての検討がなされている。土生田氏は、当地域における横穴式石室は、導入期にみられる中・北部九州の強い影響のもとに造られた横穴式石室で、地域全体に広がることなく特定の墓制集團に限られており、基本的に板石三枚をU形状に組んだ簡略化された横穴式石室である「扁平板石組石室」が最も盛行し普遍的であったと指摘しており、この背景には、当地域において偏平な板石を容易に採取することができ、また当地域の伝統

的な墓制である箱式石棺との融合または回帰現象が要因であると考えている。

また、牧本氏は、当地域の横穴式石室の構造的特徴を、①奥壁構造、②側壁構造、③玄門部（横口部）及び前面構成、④羨道、⑤玄室比の5点をもとに6類に分類している。このなかで、当地域で普遍的な玄室平面形は、方形ないし略方形プランであり、一般的な石室形態はC類石室（奥壁・側壁とも若干の石材を補うものの大型の石材をほぼ垂直に立て、玄室・羨道の幅がほぼ同じで、側壁には組み込まれない玄門石を立てる。玄室比（玄門長／奥壁幅で玄室の狭長さを比で表す）は0.9～1.7を示し、方形ないし略方形プランを呈す。さらに前壁構造の有無により2類に分類）とし、この背景には6世紀後半で築造された倉吉市向山6号墳にみるような「地域的政治集団」の首長墳への石室形態が、「地域型石室」として当地域で定着・盛行したと考えている。

両氏の定義する6世紀代後半以降鳥取県中部に普遍的にみられる地域型の横穴式石室の特徴には、玄室各壁を一枚石で立て、他の石室形態に比べ簡略化されている点が共通する。今回調査した若林1号墳も、この石室構造に類似するもので、所謂「扁平板石組石室」といわれる形態の石室である。

今回調査した若林1号墳の周辺にも、横穴式石室を主体部とする古墳が2基所在する。1号墳の東側約120m離れた標高35m付近に2号墳（前方後円墳）が所在する。1号墳同様南に開口する横穴式石室を主体部とし、石室長は4.3m以上、玄室幅は奥壁寄りで2.35mを測る。石室は、20～30cm程度の厚さをもつ大型の板石を使用し、奥壁・側壁を1枚石でU形に立てるもので、奥壁と側壁の高さをほぼ揃える。規模は異なるが、基本的には1号墳の石室形態と類似する。

同じく、本古墳の西側約30m離れた標高25m付近に3号墳（円墳？）が所在する。1号・2号墳と同様南に開口する横穴式石室を主体部とし、石室長は3.9m以上、玄室幅は奥壁寄りで1.75mを測る。奥壁・側壁に1枚石を使用する点は共通しているが、奥壁に厚さ60cm以上の大型の自然石を使用し、両側壁に比べ奥壁が約30cm高い。2号・3号墳とも未調査であり時期については不明であるが、2号墳は、墳形が前方後円墳であることから6世紀末までには築造されたと考えられる。

若林に所在する3基の古墳は、所謂「扁平板石組石室」・「地域型石室」に含まれる形態の石室である。同一丘陵の比較的近い距離にあり、ほとんど時期差なく築造されたと考えられるが、使用石材・石室形態に若干の違いがみられ、課題を残すところとなった。

以上、若林1号墳の調査によって明らかになった知見を述べた。多くの問題を残したが、本遺跡周辺の調査例の増加を待ち、今後の研究課題としたい。

註

- 1 田辺昭三 「須恵器大成」 角川書店 1981年
- 2 萩原慶幸 「山陰2号墳発掘調査概報」 倉吉市教育委員会 1984年
- 3 梶原輝雄 「取木・一反半田遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1985年
- 4 土生田純之 「日本横穴式石室の系譜」 学生社 1991年
- 5 近藤哲雄 「東伯耆における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌 第4集』 島根考古学会 1987年
- 6 牧本哲雄 「地域型横穴式石室とその背景 - 東伯耆地方を例にして - 」『田中義昭先生退官記念文集地域に根ざして』 田中義昭先生退官記念事業会 1999年

参考文献

- 萩本 勝・佐古和枝 「須恵器について」「熊田」 米子市教育委員会 1984年
山陰考古学研究集会事務局 「山陰の横穴式石室 -地域性と編年の再検討-」 山陰考古学研究集会 1996年
根鈴輝雄 「群集墳から古墳の終末へ」「新編 倉吉市史 第1巻 古代編」 倉吉市 1996年

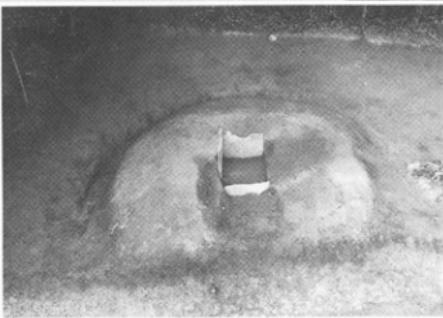
調査前遠景（南から）



調査後全景（南から）

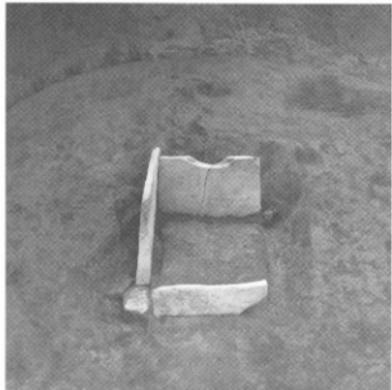


1号墳調査前全景（南から）



1号墳全景（南から）

図版 2



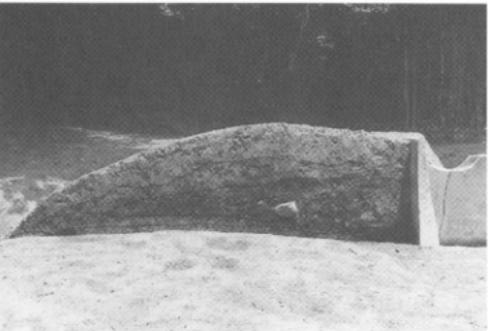
1号墳主体部玄室（南から）



1号墳主体部玄室内遺物出土状況（南から）



1号墳主体部玄室（東から）



1号墳墳丘断ち削りWベルト（南から）

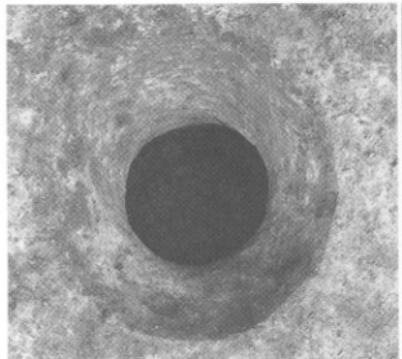


1号墳主体部玄室掘り方（南から）



1号土壙（南から）

図版 3



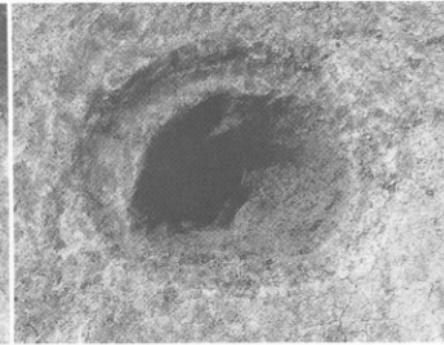
1号落し穴 (西から)



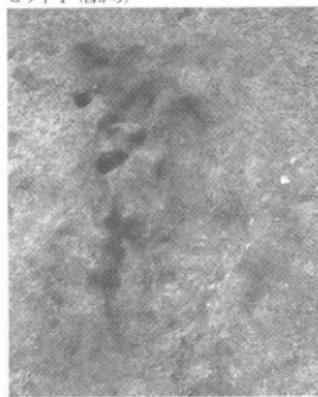
1号集石状遺構 (南から)



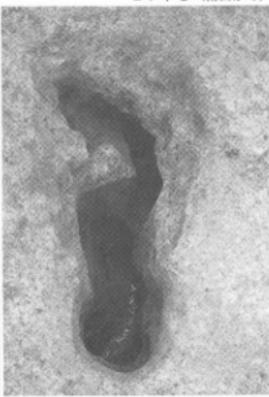
ピット 1 (西から)



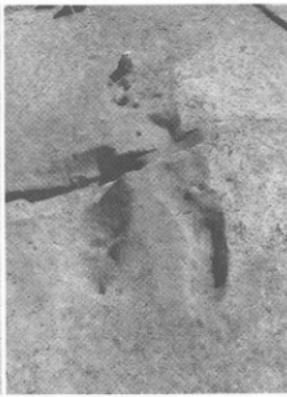
ピット 2 (南西から)



2号土塙 (東から)



3号土塙 (西から)



1号・2号溝状遺構 (北西から)

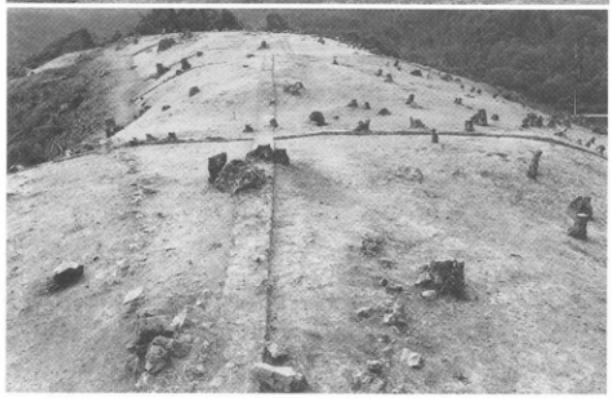
図版 4



調査区北側（南東から）



調査区北側（北西から）



調査区北側 5号平坦部
(北西から)

図版 5

調査区北側尾根（西から）



調査区北側尾根（東から）



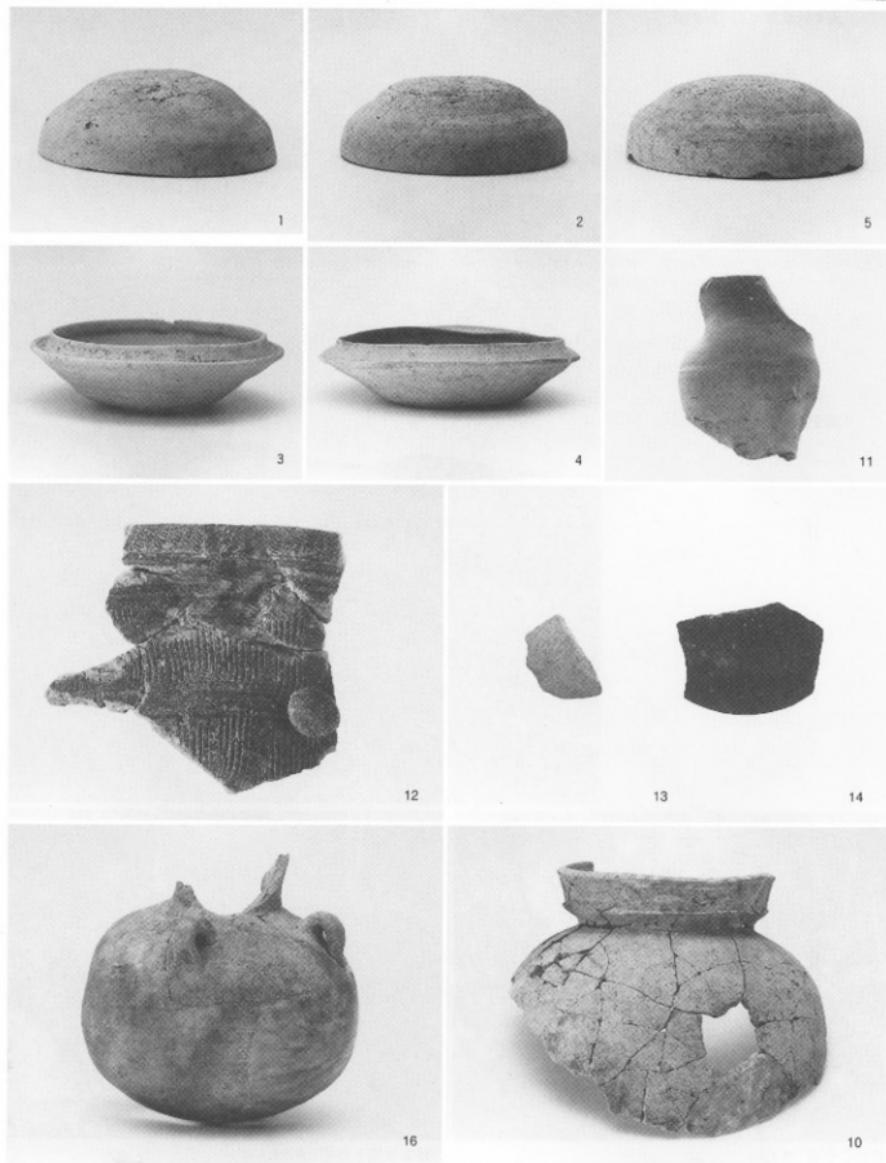
若林 2 号墳（西から）

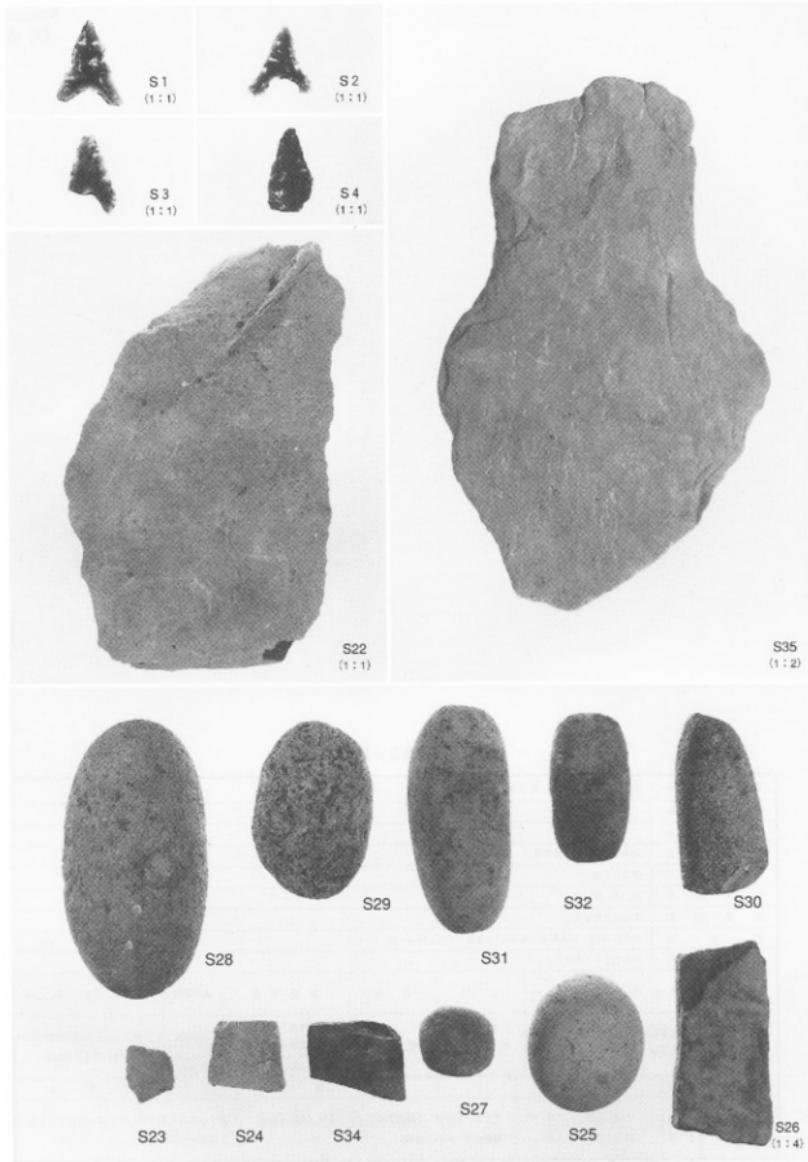


若林 2 号墳主体部（南から）

図版 6

土器





210.2
Kut
(103)

圖書館

報告書抄録

書 名	若林道場遺跡調査報告書						
著 者	—						
卷 次	—						
シリーズ名	吉古市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第103集						
編著者名	岡本智輔						
編集機関	吉古市教育委員会						
所 在 地	〒680-28011 美馬県吉古市高見町722番地 TEL 0885-22-4419						
発行年月日	西暦2000年3月24日						
所蔵道路名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調 査 原 因
若林道場	吉古市高見町若林 北石原字	31203 : 4 D TW	35° 27' 10"	133° 45' 47"	19980427～19980701	1,170m ²	一般国道312号(北条吉古道路)造成 改良事業に伴う事前調査
					19980106～19980326		
					19980430～19980401		
所取遺跡名	種 類	主な時代	主な遺 物	特 記	事 項		
若林道場	古 墳	古墳：円墳 古墳：落穴	土 器 類	土 器 類	扁平な板石を組み合せた壺穴式石室を主部とする 古墳時代中期の円墳。		
	古 墳	古墳：円墳 古墳：落穴	土 器 類	土 器 類	土 器 類		

若林遺跡発掘調査報告書

平成12年3月24日 印刷
平成12年3月24日 発行

編集 倉吉市教育委員会

印刷 勝美印刷株式会社
製本